学校法人
鎌倉女子大学

菩提樹

大船キャンパスのメインゲートから東山ゲートの間に並ぶ２８本の菩提樹が、今年も青々とした若葉をつけました。誰の計(はか)らいか判りませんが、毎年同じ時期に同じように芽吹く誠実な自然のめぐりに、今更ながら軽い感動を覚えます。植えた当時と比べますと、枝も張り、幹も大分しっかりしてきました。

この大船キャンパスを建設する際、メインゲートから図書館棟へと真っすぐに延びるアプローチ部分に何の並木を設(しつら)えようか、この界隈(かいわい)に多いサクラもいいか、あるいはイチョウもいいか、トチの木(カスターニエン)もいいか、いろいろ考えましたが、最後に辿り着いたのが菩提樹でした。

鎌倉らしい伝統や文化の香りを感じさせる樹木がほしいと考えましたし、大学のキャンパスですから学問や芸術の雰囲気を湛(たた)える木のことも思い浮かべました。

そもそも、菩提樹という名前自体に、大変深い意味が込められています。菩提樹とは、言うまでもなく、お釈迦さまが菩提（覚り）を求める修行者としてこの樹下で瞑想を続け、遂に３５にして覚りを得たという故事に由来するものです。

人生の悩み苦しみ悲しみをまるごと解決しようと苦行を続けたお釈迦さまは、ある朝、夜の闇が晴れて、朝靄(あさもや)の中から美しい世界が立ちのぼってくるのをじっとご覧になって、それまでの心の闇が晴れて、自分を含めた全ての生きとし生けるものが一つの命に包まれている事実を発見なさいました。

今では世界遺産にも指定されているインド東部のブッダガヤの遺跡には、その時釈尊がすわったといわれる菩提樹の巨木が立っています。

元々、インド人は、この木を特別視して、アシヴァッタとかピッパラと呼び、精霊の宿る木、神々の息吹があふれる木と考えていたようです。ですから、お釈迦さまも、そのことをよくご存知の上で、この木の根方に、正に覚悟をもってドッカと腰をおろされたのだと想像します。

クワ科※の常緑樹で、大きく成長すると、高さ２０メートルにも達するものもあるそうです。葉は、平坦で丸味を帯びて広がり、先にいくにしたがい細くとがるハート形をしています。

また、このインド菩提樹と並んで有名なのは、何といってもドイツの菩提樹です。シューベルトの歌曲『冬の旅』の中の第５リートが有名な「デア・リンデンバウム」（菩提樹）となっているのをご存知の方も多いと思いますが、「ローレライ」の訳詞を手掛けている近藤朔風が同じく訳詞し、独立した曲としても多くの日本人に愛唱されてきました。

泉に沿(そ)いて　繁る菩提樹
慕い行(ゆ)きては　うまし夢見つ
幹には彫(え)りぬ　ゆかし言葉
うれし悲しに　訪(と)いしそのかげ

ヴィルヘルム・ミュラーの原詞の方は、もっともっと直接的な熱く切ない恋と過ぎ去った青春の思い出の歌となっています。

ドイツ菩提樹といえば、もう一つ、名作『舞姫』の中で、森鷗外が「余(よ)は模糊たる功名の念と、検束(けんそく)に慣れたる勉強力とを持ちて、忽(たちま)ちこの欧羅巴(ヨーロッパ)の新大都の中央に立てり。何等の光彩ぞ、我目(わがめ)を射むとするは。何等の色澤(しきたく)ぞ、我心(わがこころ)を迷はさむとするは。菩提樹下と訳するときは、幽静なる境なるべく思はるれど、この大道髪の如きウンテル、デン、リンデンに来て…」と描いた、ベルリンのブランデンブルク門から真っすぐに延びる世界のメインストリートのウンター・デン・リンデン、往時はパリのシャンゼリゼを凌(しの)ぐ賑(にぎ)わいであったようです。

キャンパスの「菩提樹の道」を造る時、長年ベルリンに住む旧友が、参考にと、ウンター・デン・リンデンの菩提樹の葉を何枚か届けてくれたことがありました。

さて、本学の菩提樹の道ですが、メインゲートから歩き始めて、左側の数えて４番目の木は、少し小ぶりで、いつも葉をつけるのが一番遅い菩提樹です。芽吹きの頃は、他の木々が皆しっかり若葉をつけ出すのに、なかなか芽を出さないものですから、何だか心配になるのですが、しかし大丈夫、少し遅れはするものの立派に芽吹いて、青々とした若葉を楽しませてくれます。通るたびに、いつもどうしているか、必ず私の視線を誘う一樹です。

※植物分類科目は原産地によって異なり、ドイツ菩提樹はシナノキ科に属する落葉樹です。

>前のページへ戻る